土木学会第97代会長
近藤 徹

日本経済や国土の運営、地球環境問題など土木の未来にやるべきことはたくさんあるはず

花形の職場などない 花形にするのは自分自身

――新会長への就任おめでとうございます。まず、会長の経歴からお話いただけますか。

近藤――生まれたのは奈良県十津川村ですが、そこにいたのは2、3歳までです。その後、土木屋の父に連れられ、一家で旧満州に渡りましたが母が病気になってしまい、父だけを残して1943年の暮れに日本に引き揚げました。その父も終戦後、どうにか無事に帰ってきました。私が土木を目指したのは、父が土木屋だったからだと思います。

学生時代は橋梁、なかでも吊り橋が専門でした。瀬戸大橋はまだ夢物語だったころです。当時の建設省に入ったとき、当然道路の職場になると思っていたらダムの現場に行かされ、その後河川の専門になりました。河川の現場にいたときには、いろいろ難しい対応を迫られました。鶴見川流域の都市化による水害の激化や、環境問題で市民団体との交渉、また1974年多摩川の破堤も、翌年自分が所長になり、水害裁判に16年間もかかわりました。ただ、今になって振り返ってみると、なかなか人が経験できないことをやってきたと思います。

当時は全国で都市水害が頻発していた時期で、河川局ではそういった問題を指導する仕事

をしていました。河川局では利根川などの大きな事務所で仕事を覚えるケースが多いのですが、私はイレギュラーな道を歩んできました。

建設技監のあと、水資源開発公団に入り、水資源を開発して配水する仕事に就きました。そこでは入ってくる若い職員に対し、「花形の職場などはない、その職場を花形にするのは自分自身ですよ」と話しておりました。

現場を動かし世の中を動かす「土木」の役割は変わらない

――土木学会の会長として、これからどのようなことに取り組まれるのか、抱負をお聞かせください。

近藤――16年前ほど前、私が土木学会の副会長だったときに、土木学会という名前を変えようという話がありました。結果としてそうならなかったものの、大学では土木という名前が消えていきました。もちろん、土に取り組んで現場を動かし、安全で豊かな社会をつくるという土木の役割自体は、今も変わりはありません。ただし、土木に携わる人間が現場に足を運ばずデスクで仕事をするようになると、急速に実力を失ってしまうのではないかと心配します。

「日本のインフラ整備は進んでいる」という議論がありますが、少子高齢化社会の進行によって、これからの日本経済や国土がどう運営されていくのかが憂慮されます。高速交通ネットワークを見ても欧米に比べて整備が進んでいない。交通量が多いとか少ないとかを論じる前に、高速交通網は日本全体を国土として生かすための骨格であるという認識が必要です。ただ、その方法については、港湾、空港と高速道路、鉄道を有機的に結びつけていく必要があります。

それから地球の温暖化による大渇水や大洪水が予測されていて、これにも対応しなくてはなりません。従来はバラバラだった行政も、今はお互いに手を携えようという発想になってきています。土木学会も、同じ投資であっても国土や生活水準などが上がるというように、発信していく必要があると思います。土木の未来について、やるべきことはたくさんあるはずです。

若い人を土木の世界へ誘うための資料づくりを

近藤――よく、「土木は自然破壊ではないか」といわれます。そこで11年前に応用生態工学会を立ち上げ、生物学者と共同で研究を始めました。われわれが生態学を重視した国土計画を立てているということを、きちんと理解していただいた結果、今は反対運動は減ってきているのではないかと思っています。防災技術も安全工学やリスク科学を導入して分厚い防災工学にする必要があると思います。つまり土木という土台となる学問の上に展開するものは、たくさんあるのです。

今後、若い人を土木の世界に誘うために、大学で使ってもらえるような教材をつくりたいと思います。その代わりに「こういう勉強をしてください」という注文も付けます。最近は構造力学や水理学など、土木に必修の科目も履修しない人がいるそうです。これは若者向けにつくる教材ではありますが、それを親の世代の方が見て、子供の後押しなどをしてもらえたらいいと思います。

――学会のコミュニケーション委員会でもパンフレットをつくって、活動していますが、今後より注力すべきだと思います。最後に、これからの土木を担う若い人に向けてのメッセージをお願いします。

近藤――私自身も仕事で難しい対応を迫られて切羽詰まったことがありますが、それを乗り越えた結果、大きな新しい世界が切り開かれました。若い人たちも困難から目を背けず、積極果敢に挑んでいっていただきたいと思います。

また、土木の現場では地元の理解を得ることが欠かせません。トラブルの多くはささいなボタンの掛け違いで起きています。住む人の生きざまを理解することが必要ではないでしょうか。わが国の土木事業がそうした地道な努力によって成り立っているということを、ぜひ理解してもらえればと思います。

――今日はありがとうございました。

［聞き手］**木村 亮** 学会誌編集委員長
［文］**澤田 裕** ［撮影］**関戸 基敬**